



2009 年
会報 夏号

No.23

目の不自由な方々と共に映画鑑賞を楽しむことのできる環境づくりをしています。

シティ・ライツ代表 平塚千穂子



ごあいさつ

だんだんムシ暑くなってきましたね。皆様、夏バテなどしていませんか？

さて、5月5日の第2回シティ・ライツ映画祭から早いもので2ヶ月の時間が経ちました。

映画祭当日は、あいにくの雨の中、会員の皆様にも多数ご来場いただきまして、本当にありがとうございました。おかげ様で、映画祭は大盛況。512名の来場を記録し、アンケートでも8割以上の方々によかった・大変よかったとの評価をいただき、ほっとしております。

映画祭が終わったあとは、実行委員一同、灰になった「あしたのジョー」のごとく、放心状態でしたが(笑)、1ヶ月程してようやく反省会や、会計処理、報告書の作成も一段落して、映画祭を改めて振り返ってみると、本当にたくさんの方々にご協力いただいたことを痛感して、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

映画祭当日、トークショーにゲストとしてお越しいただいた中江裕司監督と、打上げの席でこんな話をしました。

「映画館は経営が大変だから、完全に民間っていうのは難しいよ。常設となると、スタッフの人件費もかなりかかるしね。」
「でも、絶対無理だと笑われてしまうかもしれませんが、映画館をボランティアで運営してみたいんですよ。」中江監督は笑うどころか、大真面目に、「それ、いいね。完全ボランティアで運営する映画館！うちも明日から給料払うのやめようかな・・・」と言いました。こんな風に返してくれたのは中江監督がはじめてで、びっくりすると同時にとても嬉しくなりました。
「お金で労働力と責任を買うのは簡単なことだけど、ボランティアではそうはいかない。お金に代わる何かがあれば、人は動かないもんね。その何かってものが、これからの日本にとっても必要なんじゃないかなー。人は気まぐれだしね、人を動かす求心力となる何か、何なのかはわからないけど、それを維持し続けるのは相当大変なことだと思うよ。でも、それに賭けてみるっていう勇氣はスゴイな。ボランティアで運営する映画館、おもしろい。是非、実現してほしいね。」と。

チャップリンは、「人生に必要なのは、勇氣と、想像力と、ほんの少しのお金。」と言いました。やはりほんの少しのお金というのは必要なのだと思いますが、みんなが達成を望むような素晴らしい目標があって、そのために手伝ってくれる人々が大勢いて、その人たちの力と気持ちを信じて、勇氣をもって行動すれば、夢のバリアフリー映画館も、きっとできるに違いない。シティ・ライツ映画祭は、まさにそれを1日だけ体験してみせるイベントなのだと思います。今後もますます想像力を豊かにして、本当にできたらいいと思うコミュニティー空間としての映画館を、第3回、第4回と実現しながら、多くの人々を巻き込んでいけたらいいと思います。と、言うのは簡単だけど・・・本当に裏では大変なんですけどね。それでも「あしたのジョー」は立ち上がり、またリングに立っているわけです。(笑)

ちょうど、第3回シティライツ映画祭実行委員の募集もはじまったところです。実行委員は、みんなの勇氣と想像力とほんの少しのお金を集めるイベントの屋台骨となるスタッフです。また、新たな出会いがあることを楽しみにしています。

ちなみ、中江監督の最新作「真夏の夜の夢」の公開も間近です。音声ガイドは、シティ・ライツがボランティアで作ることになりました。映画は、シェイクスピアの「真夏の夜の夢」を沖縄風にアレンジしたちょっと風変りな作品ですが、人間の忘れてしまった森の精霊(キジムン)の存在と、美しい沖縄の自然を通して、私たちに滅ぼしてはいけない大切なことを問いかける、愛のこもった作品です。東京だけでなく全国で(もちろん、沖縄の桜坂劇場でも)音声ガイド付き上映をやりましょう！というプランが進行しつつあります。音声ガイド付き上映実施の暁には、是非皆さん、観に来て下さいね。



同行鑑賞会レポート ～「これはお得！」同行鑑賞会～

これまで会報では、音声ガイド勉強会などを通して映画の新しい見方を発見しました！というお声はいくつもいただけてきました。

一方、シティ・ライツの大きな柱の同行鑑賞会については、その魅力をまだまだお伝えできていなかったのでは？そんな思いを抱いていたところへ丁度グッドタイミングで、まさぼんが3人のお友達を誘って颯爽と登場してくれました。これは原稿依頼をしない手はないではないか！ということで、今回は、ある日の同行鑑賞会の雰囲気をお友達の生の声を通して感じていただけましたら幸いです。

シティ・ライツの同行鑑賞会はほとんど毎週末にあちらこちらの映画館で行われています。視覚障害者の誘導は初めて、話をするのも初めてという方でも、ベテラン？視覚障害者が親切に誘導の仕方をお教えしながら、シティ・ライツの楽しい世界へのご案内いたしますので、どうぞ、いつでも遠慮なくご参加ください。団体行動なので映画上映時間に余裕を持って集合しなければならずその点はちょっぴり大変かもしれませんが、そこはご理解くださいね。そうそう、食事会やお茶会に参加費がかかると思ってたらしやる方をときおりお見かけしますが、みんなでご飯を食べたりお茶を飲んだりするだけです、ご自分が注文されたものの代金をお支払いいただくだけで大丈夫ですよ。

さ～て、まさぼんからの楽しい楽しいお誘いの、始まり始まりです。

～「これはお得！」同行鑑賞会～

ばさっ。ばらばら。

なっ、何？

まさにはらはらどきどきの真ただ中、私の足元にとつじょ降ってきたのは、友だちのバッグやその中身。「ごめ～ん、あまりにも力が入って足をばたばたさせたら、バッグが落ちちゃったんだよね。いやあ、でもおもしろかった～！」

『スラムドッグ・ミリオネア』を見終えた友だちの第一声がそれでした。

『スラムドッグ・ミリオネア』は、ストーリー紹介を読んだ瞬間「これは見なきゃ！」と思った映画でした。しかも、さとりさんのガイドと聞いたらこれは何が何でも行かなくちゃ！！そして、せっかくなので、シティライツ初体験の晴眼の友人3人を誘って参加することにしました。

お茶会までみんなで満喫し、帰りの電車の中。「楽しかった～。またぜひ誘ってね」とFさん。

実は、3人には誘導にも協力して欲しいとお願いして、「もちろん」と快く引き受けてくれてはいたのですが、本当はちょっぴり心配だったんです。映画をいっしょに楽しみたくて、だからこそ参加してくれたんだろうけど、知らない人とペアになって歩いてもらうことは気もつかうだろうし、ちゃんと楽しんでもらえたんだろうかと。

でも、そんな心配は私の取り越し苦労だったようです。それどころか……。

「普段の生活のことや映画のことやいろんな話ができて楽しかったよ。小学校や中学校に講演に行ったりとか、そんな仕事もあるんだあって発見があったりね。」とFさん。

「友だち同士で見に行く時には感じられない楽しみがたくさんあったよね。いつもいっしょにいるメンバーじゃない人たちと話す世界が広がるから楽しいなって。」とIさん。

「みんな明るくて、もっといろいろ話したかったね。」とY君。

音声ガイドを夢中で聴いていたFさんは、「自分は画面を見ながらだけど、音声ガイドを聴いているとより詳しくわかって得した気分だった。これはこういう風にとらえるんだ、とか、単純に楽しんでた。ときどき眼をつぶってみたりもして、今までとは違う見方ができて新鮮だった。あと、ガイドチームの人たちの雰囲気がすごく良くて、コントやってる

みたいで楽しかったしそんな楽しみもただ普通に見に行っただけじゃあじわえなかったものだから、今回誘ってもらって良かった～って思ってる。」と熱く語ってくれました。

お茶会では、みんなで映画の感想を述べ合ったり、謎の解明や裏話に驚いたり……映画の感動が大きいほど当然盛り上がります。そして、今回のスラムドッグ・ミリオネアは、お茶会での話題が尽きないすてきな映画でした。

「すごく良い映画だったから、同じ映画をいっしょに見た人たちと、ああでもない、こうでもないって話すのはすごく楽しかった。余韻にたっぷり浸れたって言うか。その日初対面で同じ映画を見たという繋がりしかない人たちなんだけど、だからこそ盛り上がる部分もあったんだろうし、そういう話を通して親密にもなれたし。」とIさん。「同じシーンでも、自分とは違う視点でとらえている人がいて、なるほどなと発見があった。自分は単に、携帯電話を渡したんだ、ぐらいいにしかなってなかったけど、みんなの話を聞いてるうちに、意外に情緒のあるシーンだったんだってわかったりね。」とY君。

これぞ、「ザ・お茶会の楽しみ！」をみんな満喫してくれたようです。

「事前解説も、ストーリーだけじゃなくて歴史や背景についてもくわしく書いてあって、すごく興味深かった。後で読み返して、ああ、あそこはそういうことだったのかって確認したりもできたし、作るのは大変だろうけど、おかげでただ見る時よりいっぱい楽しめた気がする。」と言うのはFさん。

映画が大好きなFさんは、「またぜひ誘ってね。ガイドは難しそうだけど、字幕朗読なら私でもできるかな。感情込めすぎちゃいそうだけど。いつかやってみたいな。」とまで。いつでもウェルカムよ～♪

「今回参加してとにかく楽しかったし、支えてる人たちがすてきだなって思った。もっともっとシティ・ライツの活動が広がって、いろんな人がこういう経験をして知ってほしいね。映画館自体がやってくれるのはいいなあと思ったし、将来的にはそういう映画館が増えればいいよね。」まさにそれが私たちが目指すところなのよ～！

「とにかくさ」Iさんはにこにこして言います。「お得感があるんだよね。だって、誰かが「これはいい！」とチョイスしてくれた映画を見れるんだから、たぶんそうそうはずれはないだろうし、それに現金な話だけど、本当は1800円かかるところを1000円で見れるんだもん(笑)。いっしょに見せてもらってるって感じだよ。だからまた誘ってね！」

皆さんも、「お得」いっぱいの同行鑑賞会に参加して、普段とはちよっぴり違う「楽しみ」あじわってみませんか？



特集

第2回City Lights映画祭
～トークセッション レポート～

去る5月5日、シティ・ライツ最大のイベント、シティ・ライツ映画祭が行われました。当日は雨でしたが、大勢の人が参加し、大変盛り上がりました。上映作品は「マルタのやさしい刺繍」、「ザ・マジックアワー」の2本、その合間に、スペシャルゲスト中江裕司監督、平塚リーダー、ノンちゃんこと斉藤恵子実行委員長、司会の壬生さんによるトークセッション「バリアフリー映画から広がる新しいコミュニティの可能性」が行われました。夏号では、トークセッションの内容を抜粋した形でお届けします。どうぞ！！

司会進行の壬生さんが沖縄で撮影してきた、桜坂劇場の紹介映像に続いて、中江裕司監督、平塚リーダー、ノンちゃんこと斉藤恵子さんが登場。

中江監督の沖縄方言による挨拶「ぐすーよーちゅうがなびら。わんねーうちなーぬいえいがちゆくやーぬ、中江裕司やいびーん。ゆたしくうにげーさびら(皆さんこんにちは。私は沖縄の映画作家の、中江裕司と申します。よろしくお願ひ致します)」で、会場は一気になごやかな雰囲気になりました。

町の映画館とシネコンとの違いから、監督の最新作の話まで、多いに盛り上がったトークセッションの、ごく一部をお届けします。

(中江)桜坂劇場のルーツは、戦後すぐにできた芝居小屋です。それが桜坂琉映という映画館になり、2005年に僕らが引き継ぎました。映画館というよりも劇場、みんなが集まる場所として、どれだけ娯楽を提供できるかと考えています。幸いビルの一室ではなくて、地面から生えてる劇場なので、間口が広い。ワークショップやバザーなど、いろいろな連携をしながら運営しています。

(平塚)私たちの目標も、自分たちの劇場を持つことです。劇場があれば、音声ガイドをつけたりイベントをしたり、いろんなチャレンジができる。様々なタイプの間人が集まってきて、それぞれの能力を発揮する。また、発見する。そういう場所になったらいいなあ、と思っています。

(監督)実際、映画館っていろんな人が来ますよね。僕が劇場のスタッフにいつも言っているのは「劇場に来たお客さんは、何があっても拒否をするな」ということ。劇場というのは、どこかで社会に適用できない人の逃げ場という側面があり、守ってあげたいという気持ちがあるんです。どこか怪しい人とも一緒にいることが、いまの社会では少なくなっているけれど、いろんな人と混ざる時間が大切だと思うんです。

(平塚)すごくバリアフリーな劇場ですね。誰もがそこにいることを許されている、温かい雰囲気。そしてその中に視覚障害者もいる、という劇場ができれば、面白いですね。

(斉藤)昔は入れ替え制じゃないから、ずっといてもよくて、暗くて隠れ場所みたいな空間だったんですよね。私たちの夢の劇場も、誰でも来てもいいし、来たら面白い、そんな場所を作れたらいいなあ、と思います。

(監督)是非たちあげてください。僕は、桜坂劇場は自分のものではなく、以前の劇場から預かっていると思っています。正直、経営は大変だけれど、この預かりものは社会のなかに絶対に必要なものです。だから確実に次の世代の誰かにつなぎたいと思っています。

【中江監督のプロフィール】

1960年、京都府生まれ。80年、琉球大学に入学とともに沖縄に移住。

92年『パイナップル・ツアーズ』の第2話『春子とヒデオシ』で監督デビュー。

94年『パイパティローマ』を監督。

99年『ナビの恋』でベルリン映画祭NETPAC賞を受賞、全国的なヒットとなる。

03年には、石垣島の楽団のドキュメンタリー『白百合ク ラブ・東京へ行く』を自主製作。

その他の監督作に『ホテル・ハイ ビスカス』『恋しくて』『40歳問題』など。

最新作『真夏の夜の 夢』が、この夏公開される。

また、那覇市内で廃業した映画館を、2005年7月に「桜坂劇場」としてリニューアルオープン。

劇場を運営する株式会社クランクの 代表取締役社長も務めている。



中江裕司監督最新作 「真夏の夜の夢」

7月25日より全国ロードショー

シェイクスピアの戯曲「真夏の夜の夢」を、沖縄風に描いた恋愛ファンタジー。

沖縄の離島、世嘉富島を舞台に、里帰りしたOLと彼女を追ってきた不倫の恋人、個性的な島民たち、さらには島の精霊たちが大騒動を巻き起こす！

只今、シティ・ライツでは音声ガイドを作成中です。全国各地で音声ガイド付き上映が実施できればと思っています。詳細は決まり次第メーリングリストやブログでお知らせしていきます。どうぞご期待下さい！





勝手におすすめシネマ Vol.9 『ゆきゆきて、神軍』

夏がやってきました。

この季節の到来とともに毎年思い出されるのが、“戦争”という暗い過去。

第二次世界大戦での敗戦から今年で 64 年。あの歴史の証人たちが次から次へとこの世を去っていく中、残された戦後しか知らない私たちは、どのようにその歴史を受け止めていったらいいのでしょうか。

1987 年 8 月、渋谷・ユーススペースにて公開開始からドキュメンタリー作品としてはまれな大ヒットを飛ばし、5ヶ月間のロングラン上映となった問題作『ゆきゆきて、神軍』をご紹介します。

『ゆきゆきて、神軍』(1987 年)

監督／撮影：原一男、企画：今村昌平

1987 年ベルリン国際映画祭カリガリ映画賞受賞

“神軍平等兵”を名乗り果敢で激しい行動を取り続ける奥崎謙三は、太平洋戦争時、自らも派遣されていたニューギニアにおける極限状況下で起こったある事件の真相を明らかにしようとしていた。

ある事件とは、「上官による部下射殺事件」と「人食事件」。

戦後 40 年以上経っても、彼の怒りと悲しみは消えることなどなかった。

そして彼は、まるで何かにとりつかれたかのように、走り続けるのだった……。

奥崎謙三という人物が戦後行った問題行為について、参考までに以下に記しておきます。

不動産業者暴行事件(傷害致死罪で懲役 10 年)

昭和天皇パチンコ狙撃事件(暴行罪で懲役 1 年 6 ヶ月)

皇室ポルノビラ事件(猥褻凶画頒布で懲役 1 年 2 ヶ月)

田中角栄に対する殺人予備罪(書類送検されるが不起訴)

(他にもありますが、本作品を刺激的にご覧いただくために、あえてふせさせていただきます。)

一人の人間をここまで狂気に走らせてしまうものが“戦争”なのです。

もちろん、奥崎謙三という人の本質に暴力的な傾向があったのは否定できないでしょう。でも、戦争がなければ、彼の人生はここまで狂わなかったはず。

戦争という狂気について、人間の狂気について、出口のない暗闇を彷徨うかのごとく考え込まされてしまう 1 本です。

(大田悠子)



思い出の映画

— 思い出は、名画とともにいつまでも —。

このコーナーでは“思い出の映画”にまつわる投稿エッセイをご紹介します。皆さんの汗と涙の人生をセピア色に彩る素敵な名画の数々をエピソードとともに寄せ下さい！！

私の胸キュン映画「フォロー・ミー」

<平野ひさ子>

青春の1ページという感じで、思い出すと胸がキュンとする映画が1972年製作の「フォロー・ミー」です。といっても、ご存じない方が多いと思います。何しろビデオもDVDも発売されていないので、たまーにNHKなどで放映される時しか見られないのです。私も昨年末にテレビ放映があることを教えていただいて、ようやく録画に成功しました。というわけで、まずは映画の紹介を。

監督:キャロル・リード 音楽:ジョン・バリー

出演(役名):ミア・ファロー(ベリンダ)、トポル(探偵)、マイケル・ジェイストン(チャールズ)

あらすじ

ロンドンに住む会計士チャールズが、ヒッピーのアメリカ娘ベリンダと恋に落ち、結婚。ところが、ベリンダはチャールズを取り巻く上流階級の気取った世界になじめず、忙しく仕事をする夫とのふれあいも持たず、一人で出歩くようになる。その様子に浮気を疑うチャールズが探偵を依頼する。ベリンダを尾行する探偵が実にユニークで、白いコートに白のハンチングという目立つスタイルで、マカロンを食べながら毎日楽しそうにベリンダの後をついて行く。いつしかベリンダも探偵の存在を意識し、互いに視線を交わしてお気に入りの場所を示しながら、街歩きを楽しむようになる。

やがてその関係を知ったチャールズは激怒。ベリンダも彼が夫の雇った探偵であると知り、ショックで家を出る。愛しているのに行き違ってしまう二人に探偵がひとつの提案をする。それはロンドン市内を歩き回るベリンダに、チャールズがひたすらついて歩くこと。10日間、一言も言葉を交わさず、彼女を見て、歩くこと…。(あらすじ以上)



街歩きのシーンに次々と登場するロンドンの名所が本当に美しく、食べ物や動物の名前がついた通りを示し合ったり、巨大迷路を競うように駆けてピクニックシートを広げて待っていたりするベリンダと探偵がキュートで、何度見ても楽しめます。さらにテーマ曲が印象的でとてもよいのです。

私はクラスメイトと見に行ったのですが、映画館の前で一人の青年に「よかったらどうぞ」と2枚の前売り券を差し出されてびっくり。「『待ち人來たらず』だったのかしら」と後姿を見送って、ありがたく頂いたのですが、そんな出来事も胸キュンの思い出です。

ちなみに、「Shall we ダンス？」の探偵事務所には「フォロー・ミー」のポスターが額に入れて飾られていました。周防正行監督にも思い出の映画なのかもしれませんね。



お知らせ

■新規会員のご紹介

(2009年4月1日～2009年6月15日までにご入会いただいた方々です)

[正会員]・酒巻 和男(東京都大田区在住)・広瀬 邦樹(東京都文京区在住)

・飯田 育生(静岡県浜松市在住)・山下 春菜(東京都杉並区在住)・大島 尚浩(東京都大田区在住)

■音声ガイド付き上映会のお知らせ

東京都調布市で行われる音声ガイド付き上映会のお知らせです。

8月11日(火曜日)、あの石原裕次郎主演の青春冒険映画「太平洋ひとりぼっち」シリーズを、音声ガイド付きで上映します。裕次郎ファンもそうでない方も、古い映画の貴重な上映機会となりますので、是非大きなホールでお楽しみ下さい。

(毎回、平日ともあって、視覚障害者の来場者が非常に少ないシネサロン。せっかく市の行政が機会をつくってくれているバリアフリー上映会なので、もうちょっと、視覚障害者の来場数が増えないかなと思っています。鑑賞料も無料です。もしご都合のあう方がいらしたら、是非おこしください。近隣の視覚障害者のお知り合いがいらっしゃいましたら、是非、ご案内下さい)

【調布シネサロン】

上映作品:「太平洋ひとりぼっち」1963年 日活映画(97分) 監督:市川 崑

[作品介绍]1962年の夏、弱冠22歳の一人の青年が、小型ヨットを駆って94日間の太平洋横断を成功させた。その青年・堀江謙一の、日記風の同名の手記を原作にして、市川崑が演出した青春冒険映画。無風状態の大阪湾内を1日半も迷走した“マーメイド号”は一転してシケで大荒れの海原で悪戦苦闘する。やっと太平洋に出たと思えば今度は台風。やがて水は腐り、食料も不足気味になり、体力も消耗し尽くす。しかし目指すサンフランシスコは目前に迫っていた。一人の青年が壮拳を成し遂げる様子を、スリルとユーモアで描く感動的作品。

[出演]石原裕次郎 田中絹代 浅丘ルリ子 他

日時:8月11日(火曜日)

場所:調布市グリーンホール

(京王線調布駅中央口よりすぐ。※南側階段をおりて右手の建物です。)

上映開始:11時~と15時~の2回。(音声ガイド付き)

各回30分前開場

鑑賞料:無料

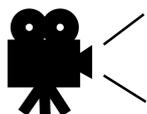
主催:調布市文化・コミュニティ振興財団

協力:シティ・ライツ

※音声ガイドをお聞きになる方は、FMラジオをご持参ください。

周波数 FM88.5MHz で音声ガイドをお聞きになれます。(当日受付にてラジオの貸出もあります。)

※どのくらいの方に来ていただけるのか心配なので、いらっしゃる方は、シティ・ライツ事務局までご一報いただくと嬉しいです。調布駅からの誘導をご希望の方も、駅からご案内いたしますので、ご連絡ください。



編集後記

(会報編集課 ノンちゃん)

皆様こんにちは！今年も夏がやってきました。夏と言えば夏休み。夏休みと言えば旅行。ということで、先日、一足お先に、友人と2人旅をしてきました。行き先は北東北。青森県にある十二湖という美しい湖を散策したり、温泉につかったり、美味しいものを

たくさん食べたり・・・、そして、ローカル列車人気ナンバーワンと言われる五能線の端から端、同じくローカル線の花輪線の端から端にも乗ってきました。五能線は秋田県と青森県を結ぶ列車で、リゾートしらかみという快速列車にはとっても乗

り心地の素晴らしいコンパートメントまでついています。海のすぐ脇を通る区間もあるので、車窓の風景もとっても素敵です。皆さんも機会がありましたらぜひ乗ってみてください。お勧めです！！

と、映画には関係のないことを書き綴ってしまった編集後記ですが、今度は、シティ・ライツ映画祭でご縁のできた中江監督の劇場・桜坂劇場へもぜひひ行きたいと思う今日この頃です。って、ちょっと無理やり繋げ過ぎでしょうか？(笑)

(会報編集課 吉川)

野菜やフルーツがおいしい季節になりました。スーパーの棚に並べられた色とりどりの野菜たちや果物の群れを見てみると、自然の生命力というものを強く感じます。

今年も半分終わりましたが、上半期の上映作品はオスカーがらみの作品が多かったせいか、可也豊作だったのではないかと考えています。個人的にすきなのはベンジャミン・パトンかな。魅力的なキャラクターが数多く出てきて、おのおの哲学的なことを語りそれらを要領よく吸収しつつ成長してゆく主人公。こういうストーリー展開が自分大好きなのでとても楽しめました。あとは、グラントリノ。不器用だが力強く生きる堅物老人と、隣に住む心優しきアジア系な青年との交流を描いたヒューマンドラマ。非常に感動しました。この映画、家2件で撮っているんですね。非常に狭い世界で撮影しながら、かなりスケールの大きな作品に仕上がっていました。ヒローイ場所で撮影すればスケールが大きくなるものでもないのかな～としみじみ感じました。

下半期も多くの良作佳作がでてくることを期待しつつ今回の編集後記を締めたいと思います、ではまた次号で。

(会報編集課 太田)

今年の夏もゲリラ豪雨に悩まされるのかしら？

もしかしたら、この会報が皆さんの手に渡っているころには、もう悩まされているかもしれませんね。

全身ぐしょぐしょで足下は泥だらけ。電車は落雷で運転見合わせ。そんでもって街は苛立った人だらけ。

ああ、考えるだけで憂鬱だね……。

ゲリラ豪雨も地球温暖化、ヒートアイランド現象が原因だそうです。エコに暮らせば少しは報われるのでしょうか？

マイバッグでお買い物したり、割り箸を極力もらわないようにしたり、エアコンを使わないようにしたり、いろいろ努力はしていますが、なかなか報われない気がする。ん……、みんな、頑張れ～！！

(会報編集課 竹内)

今回、編集に初めて携わせて頂き、改めて多くの人の想いやつながりを感じました。映画を通して、これからも様々な出会いや夢が生まれていきますように！



お忙しい中、今回の会報作成に協力いただいた方々には、大変感謝しております。ありがとうございました。

皆さまの投稿を、心よりお待ちしております。宛先は、kaihou@citylights01.org。次回の発行は10月10日。

投稿される方は、9月第2土曜日までをお願いします。『会報のデータ送信』を希望の方には、会報のテキストメール送信にも対応します。ご希望の方がいらっしゃれば、会報編集担当アドレス<kaihou@citylights01.org>まで、氏名と会報の送信を希望するメールアドレスを記入して、お申し込みください。



2009年 夏号 2009年7月10日発行

編集:吉川俊平、斉藤恵子、大田悠子、竹内真琴

発行者:バリアフリー映画鑑賞推進団体 シティ・ライツ

事務局:〒114-0016 東京都北区上中里 1-35-15 TEL&FAX 03-3917-1995

E-mail mail@citylights01.org URL <http://www.citylights01.org>

